

平成 28 年
9 月 30 日

病害虫発生予報 10月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

収穫後は被害残渣や被害葉を圃場から持ち出し、
次作の病害虫の発生を抑えましょう。

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

共通害虫：オオタバコガ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

【その他の病害虫】

サツマイモ， ナシ， イチゴ， 促成トマト， 秋冬ハクサイ， 冬レタス， 秋冬ネギ，
共通害虫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

【防除所レポート】

平成 28 年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応・・・・・・・・ 3

平成 28 年産大豆におけるダイズ葉焼病の発生について・・・・・・・・ 5

II. 今月の気象予報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの
「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で
確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。
ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/>
フェロモントラップデータ随時更新中

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

共通害虫

1. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月のフェロモントラップへの誘殺数は、土浦市、龍ヶ崎市、筑西市で平年並である。
- ② 9月下旬現在、秋冬ハクサイ等の一部圃場で発生を確認している。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培ではハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ② 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。なお、防除適期はフェロモントラップへの誘殺数が増加したときであるので、誘殺状況（病害虫防除所ホームページ）を参考にする。
- ③ 薬剤は、葉裏や株元にもかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードもしくは系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、定植時および結球始期の防除を徹底する。
- ⑤ トマト、ピーマン等では収穫終期まで加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
サツマイモ	ナカジロシタバ	発生量：やや多い	9月下旬現在、やや多い発生である。
ナシ	黒星病	発生量：—	9月下旬現在、葉における発生は平年並である。秋季防除を徹底する。罹病葉は翌年の伝染源となるので、落葉を適切に処理する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	ハダニ類		
	炭疽病	発生量：やや少ない	9月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
促成トマト	黄化葉巻病	発生量：－	9月上旬現在，抑制トマトにおいて平年並～やや多い発生である。発病株はただちに抜き取り，適切に処分する。促成トマトでは，ハウスの開口部に 0.4mm 目合いの防虫ネットを設置する等，媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。
秋冬ハクサイ	軟腐病	発生時期：早い 発生量：やや多い ～多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。台風等の強風を伴う降雨の後には，防除を徹底する。
	べと病	発生時期：早い 発生量：平年並 ～やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	アブラムシ類	発生量：多い	9月下旬現在，平年より多い発生である。
	コナガ	発生量：平年並 ～やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
冬レタス	腐敗病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。結球開始期に降雨が続くと発生しやすいので，防除を徹底する。
秋冬ネギ	さび病	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	べと病	発生量：平年並 ～やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	ネギアザミウマ	発生量：平年並 ～やや少ない	9月下旬現在，平年並～やや少ない発生である。
共通害虫	ハスモンヨトウ	発生量：平年並 ～やや多い	9月下旬現在，イチゴおよび秋冬ハクサイにおいて平年並の発生である。9月のフェロモントラップへの誘殺数は常陸大宮市，県予察圃（水戸市）でやや多く，県予察圃（笠間市），龍ヶ崎市で平年並～やや多く，鉾田市，土浦市で平年並，筑西市で平年より少ない。

平成 28 年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応

県内の調査圃場（57 圃場）等の調査結果をもとに、本年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応についてまとめましたので、参考にしてください。

1. いもち病

低温，日照不足，多湿等の気象条件で発生する病害である。葉いもちは例年梅雨入り後の 6 月下旬から発生し始め，7 月に最も発生が多くなる。その後，出穂期頃に降雨が続くと，穂いもちが多発生する。

[本年の発生経過]

6 月中下旬に感染好適条件が出現し（BLASTAM[※]による），7 月上旬の調査で，県内の広範囲に葉いもちの発生が確認された。その後，7 月は梅雨前線や湿った空気の影響で曇雨天の日が多かったが，7 月を通しての降水量は平年より少なくなり，7 月下旬以降の発生は平年よりやや少なくなりました。

出穂期頃の 8 月上旬は，気温が平年並～高く推移し，日照時間が平年並～多かった。そのため，8 月中旬以降は台風の影響で降水量が平年より多くなったものの，8 月下旬，9 月上旬の調査で穂いもちの発生は平年よりやや少なくなった。

※BLASTAM（ブラスタム）：気象条件から葉いもちの感染好適日を判定するプログラム。

[次作に向けた対応]

- ① 種子は必ず更新し，未消毒の種子を使用する場合は種子消毒できるよう準備する。
- ② 常発地では育苗箱施薬剤を準備する。

2. 縞葉枯病

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。ヒメトビウンカの幼虫はイネ科雑草で越冬し，4 月上旬頃に羽化して麦畑へ移動，増殖した後，6 月上旬頃に成虫が水田に飛来する。水稲は，イネ縞葉枯ウイルスを保毒したヒメトビウンカに吸汁されるとウイルスに感染し，発病する。

[本年の発生経過]

8 月上旬には県北地域を除く県内全域で本病の発生を確認し，県全体の発病株率，発生地点率は H27，H26 に次いで高くなり，本年を含む過去 11 年間で 3 位となった。8 月下旬の発病株率は H27 よりも低かった。なお地域別の発病株率は，県西，県南，県央地域の順で高かった（表）。

表 8 月下旬における本田での縞葉枯病の発病株率及び発生地点率

地域	調査 地点数	発病株率(%)		発生地点率 (%)	
		H28	H27	H28	H27
県北	8	0	0.5	0	13
県央	15	0.8	1.1	7	20
鹿行	6	0	0.7	0	17
県南	19	2.1	6.1	32	47
県西	9	9.8	22.7	78	100
県全体	57	2.5	6.0	25	40

[次作に向けた対応]

- ① 収穫後は耕起してヒコバエをすき込むとともに，ヒメトビウンカの越冬場所となる畦畔のイネ科雑草の除草を徹底する。
- ② 発生の多かった地域では，ヒメトビウンカの防除対策として，育苗箱施薬剤を準備する。
- ③ 縞葉枯病抵抗性品種の導入を検討する。

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ等）

成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息する。出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。孵化した幼虫も同様に収穫期まで穂を加害する。

[本年の発生経過]

水田内における発生は、7月上旬まで平年並であったが、7月下旬以降増加して平年よりやや多く推移した（図1）。特にクモヘリカメムシは、防除適期直前の7月下旬時点で県央、鹿行および県南地域を中心に発生が平年よりやや多かったため、8月1日に病害虫速報No.2を発表した。水田内における発生種は、調査期間をとおしてクモヘリカメムシが最も多かった（図2）。なお、県南地域ではイネカメムシが最も多かった。

[次作に向けた対応]

- ① 例年発生が多い地域では、水田内外のイネ科雑草の除草に努める。ただし、水田周辺の除草は水稻の出穂期近くになって行くと、斑点米カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、出穂期2週間前までに終わらせる。
- ② 幼虫を対象とした防除適期は出穂10～15日後頃（乳熟期）である。
- ③ 多発した場合は、②の時期に先立ち、穂揃期に成虫を対象とした防除を実施する。

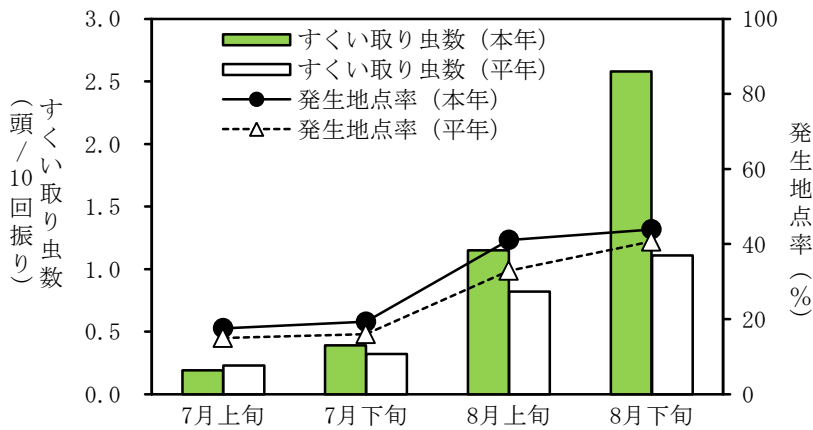


図1 水田内における斑点米カメムシ類の発生推移

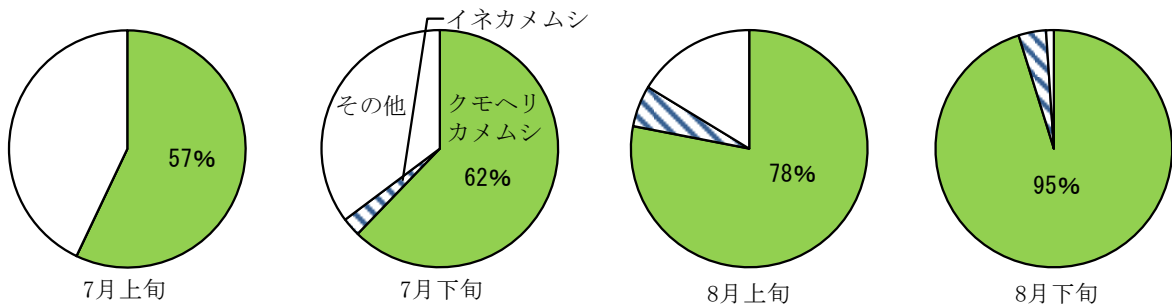


図2 水田内における斑点米カメムシ類の時期別種構成

※グラフ内の数値はクモヘリカメムシの構成比を示す。

平成 28 年産大豆におけるダイズ葉焼病の発生について

9月下旬現在、ダイズ葉焼病が県下全域で発生しています。病害の特徴や本年の発生経過をまとめましたので、次作に向けた対応の参考にしてください。

【葉焼病の特徴】

- ・主に葉に発生し、病斑は1～2mmの大きさで褐色～黒褐色を呈し、その周りに淡黄色のハローができる。病斑の表面はあまり盛り上がらないが、裏面は中央が少し盛り上がる。

※詳細は防除所ホームページ「病害虫資料室」

(<http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/>) をご参照ください。

- ・高温期の発生が多く、病原細菌 (*Xanthomonas axonopodis* pv. *glycinea*) が風雨で運ばれて大豆の葉等に侵入し、数日間潜伏した後に発病する。

【本年の発生経過】

開花前は発病が認められなかったが、開花期～莢伸長期にあたる8月下旬時点で一部圃場での発病を確認し、平年よりやや多い発生であった。これは、8月第4、5半旬に接近・通過した台風7、9号に伴う大雨・強風により、発生が助長されたものと考えられる。その後、発生を助長する条件が続き、9月下旬には平年より多い発生となった。(表)

表 平成 28 年産大豆におけるダイズ葉焼病の発生推移

調査時期 (生育ステージ)	7月下旬 (分枝発生期)			8月下旬 (開花期～莢伸長期)			9月下旬 (子実肥大期)		
	本年	平年 ²⁾	順位 ³⁾	本年	平年	順位	本年	平年	順位
発病度 ¹⁾	0	0	1-11	0.3	0.2	3	28.4	7.8	1
発生地点率 (%)	0	0	1-11	15	11	4	100	61	1

1) 発病度：病斑をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

2) 平年：平成18～27年の値の平均値

3) 順位：本年を含む過去11年間における本年値の順位(1-11は1位から11位が同じ値であることを示す。)

【次作に向けた対応】

- ① 被害残渣を適切に処理する。
- ② 発病した圃場では大豆の連作を避ける。
- ③ 積極的に種子更新を行う。
- ④ 発病初期に薬剤防除を行う。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 10月1日から10月30日)

気象庁(9月29日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	10	30	60
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<1週目の予報> 10月1日(土曜日)から10月7日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率80%

<2週目の予報> 10月8日(土曜日)から10月14日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

<3週目から4週目の予報> 10月15日(土曜日)から10月28日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、異なる作用機構分類* (FRACコード, IRACコード)の薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病虫害発生予報5月号(平成28年4月28日発表)の防除所レポートを参照してください。